様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月６日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21710253
研究課題名（和文）　中国人の戦争記憶―被害実態と記憶の形成過程―

研究課題名（英文）　Memory of the *Sino-Japanese* war in China; to clarify situation of the war and process of getting the collective memory.

研究代表者
石井　弓　（ISHII　YUMI）
東京大学・大学院総合文化研究科・特任講師
研究者番号：50466819

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、中国人の戦争記憶が、多様な社会的人為的チャネルを経由して、現在を生きる人々の意識に刻み込まれ記憶として形成される過程を検証し、また如何なる形で保持されているのかを明らかにすることである。

研究手法として、日中戦争の最前線である山西省農村部で広範なフィールド・ワークを行い、195 名の農民に戦争の記憶を聞き取った。その中で、農民たちが口頭で歌い継ぐ「順口溜」（出来事についての簡素で短い歌）を研究対象として取り上げ、収集した。日中戦争を歌った「順口溜」を分析することで、村に生きる人々が共有してきた戦争の語りや歌い込まれた感情を論じることに成功し、また、「順口溜」の共有範囲から、現在の交通網からは乖離した「お喋りのコミュニティー」を抽出した。山西省農村において記憶は、人々の往来する地域でお喋りを介して共有されており、その範囲は近代以前から続くコミュニティーであることが分かった。この成果については、2011 年日本現代中国学会（第 61 回全国学術大会）で、「「順口溜」から読み解く抗日戦争の記憶」として発表すると共に、博士論文「記憶としての日中戦争―インタビューによる他者理解の可能性」の一部として執筆した。

「順口溜」の共有範囲は、中華人民共和国以前の雨乞い祭祀活動の範囲と重なっている。また、地域で行われる伝統演劇の上演は、抗日戦争の情報を交換すると共に、伝統演劇の中の多様な世界観や歌のフレーズが、「順口溜」の歌詞や記憶にも影響を与えている。ここから、雨乞いの活動や伝統劇と集合的記憶との関連性を考察することが、今後の研究課題として浮き彫りになった。

研究成果の概要（英文）：

This study is aiming to answer the question of why Chinese postwar generation memorizes Sino-Japanese war as if it were their own experience. For this purpose, I combine the technique of field work with the concept of "Collective Memory".

Traditional memory research often regarded the collective memory as the synonymous to national discourse, and did not pay attention to the process in which these social representation permeated a person. The field work was conducted in rural areas of Shanxi Province, which was the forefront of the war, focusing on post-war generations

individuals. Through this Field work we re-think the "Collective Memory" from the perspective of the individual.

I interviewed 195 people, and as a result, find many “shunkouliu” (well known and widely shared simple song about each incident), which reveal strong link between rural community and memory of individuals.

Although the independent individual had been assumed after modernization, these individuals are based on the mechanism of interpenetration between self and the others, especially in the dimension such as memory. In rural communities, the boundary between an individual and community is ambiguous, memory and sense of value are shared in group, permeate each individual mutually.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：地域研究
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：日中戦争、記憶、オーラル・ヒストリー、コミュニティー、戦争記憶

１．研究開始当初の背景

ホロコーストが被害者の全消滅によって事件の隠蔽を図ったことは、資料的根拠に依拠するそれまでの歴史学に、再考を迫った。ドイツの歴史家論争においてハーバマス（『過ぎ去ろうとしない過去』）が指摘したのは、資料の空白や痕跡の失われたものに対する資料実証の無効性である。同様に、「南京大虐殺」を巡る数の議論においても、歴史学の行き詰まりが表面化した。これに対し元「慰安婦」たちのカムアウトは、失われたものの現出として、多元的な現実とそれが構成する「様々な歴史」の存在を歴史学に突きつけた。生存者の女性の個人的体験の信憑性が問われた時、ならばその真偽は誰が判定できるのか（上野2000「記憶の語りなおし方」）、という問いが発せられ、「正史」ばかりでなく「歴史家」が占める特権的位置が相対化されたといえよう。

一方、言語論的転回以降、P・ノラ（『記憶の場』）やP・リクール（『時間と物語』）らにより、歴史を、「現在における過去の痕跡の再構成」（J・ルゴフ）として捉える見方がヨーロッパ歴史学界を中心に展開されている。「歴史叙述の物語性」という視点は国民国家言説の再考（B・アンダーソン『想像の共同体』、E・ホブズボウム『創られた伝統』など）と結びつき、「記憶」を通して過去を再考する潮流を生み出してきた。その過程で M・アルヴァックス『集合的記憶』やF・イェイツ『記憶術』

が見直され、ある一定の集団の中で文化的、社会的に構築されていく「記憶」が研究対象として浮上してきた。

中国人の戦争記憶は、「感情記憶」として「歴史の客観真実性」と対置された（孫歌 2000「日中戦争―感情と記憶の構図」）ことからも分かるように、上記のような歴史と記憶を巡る問いに深く関わる。本研究では、フィールド・ワークという手法を選択し、日中戦争に関する聞き取りを行う際の日本人としての立場性を絶えず問いつつ、現在のコミュニティー内部からの視点を取り入れることで、これまでの歴史と記憶を巡る問題を更に深める考察を行う。

２．研究の目的

本研究は、日中戦争の最前線であった山西省盂県農村部において、戦争実態は如何なるものであったのか、その出来事が戦後に国、地域、村の集合的記憶、或いは個人の記憶として如何なる過程を経て結晶していったのか（記憶の形成過程）をフィールド・ワークと文献資料の両面から分析する。具体的には、まず①日中戦争の実態をフィールド・ワークによって掘り起こす。次に、戦後各時代の農村情報媒体について②～⑤の分析項目を設定し、戦争経験が公的言説との関係の中で如何に伝達/継承/否定されたかを分析する。各分析項目の具体的テーマを以下に示す。

【戦争実態の解明】

①戦争体験の掘り起こし：農村における戦争を巡る様々な「事実」の掘り起こし。戦後、公的言説から排除され、沈黙を強いられた者たちの戦争記憶。

【出来事が記憶に結晶していく過程】

②政治運動と戦争記憶の関係（1950 年～70 年代）：政治運動による戦争記憶の差別化と身体化。

③風俗習慣と戦争記憶の関係（1950 年代～70 年代）：覚え歌（順口溜）に残された、文字化された歴史資料とは異なる、農民たちの戦争体験の捉え方。

④視覚イメージを媒介とする戦争記憶の形成（1960 年代～80 年代）：村における老人の日常的な語りと、映画の視覚イメージの融合。夢という形での追体験。

⑤観光による追体験（1970 年代～現在）：「紅色旅遊」、遠足等、移動を伴う非日常としての追体験。

３．研究の方法

山西省盂県農村部を中心に、フィールド・ワークを行うと共に、文献資料を収集し、両者を比較検討する。文献資料については、中国南京檔案館、山西省檔案館、盂県檔案館、北京国家図書館、山西大学図書館において、対象地域の歴史、宣伝政策、政治運動などに関する檔案、文史資料、新聞資料、近年刊行された口述史資料、村で使用されていた教科書などを収集する。映像・画像資料については、抗日映画の DVD、50～70 年代の連環画を収集する。調査者は、2006 年度国際交流基金のアジア次世代リーダーフェローシップを得て 4 ヶ月間、延べ 160 人に対する聞き取りを行った。そこから抽出したテーマ（研究目的で言及）について、農村を再訪し更に内容を絞った聞き取り調査を行う。フィールド・ワークではこれまでに構築した現地の協力者体制を活用する。各テーマ①～⑤については次のような観点から聞き取り・文献調査を行う。

①戦争体験の掘り起こし――体験者から戦争実態と戦争経験を巡る戦後の状況を聞き取り、記録する。特にこれまで語られなかった漢奸とされた人々の経験や心情、その影響を受けた子世代の体験を意識的に収集し、戦争経験の

複雑さを示す資料として記録する。同時に、記憶の形成と表裏を成す沈黙の問題を、公的言説から排除され、厳しい生活を余儀なくされた漢奸たちの戦争記憶から浮彫りにする。中国における戦争体験及び戦後史を日本人が聞き取ったという前例は少なく、聞き取った口述は貴重な資料となるため、資料集としてまとめ、出版することを目指す。

②政治運動と記憶の関係――「訴苦」(1940-50 年代)、「四史」(1960-70 年代)、「憶苦思甜」(1960-80 年代)の 3 つの政治運動について、運動を実施した世代や運動を通して教育を受けた世代に聞き取りを行う。これにより体験者の記憶が如何に差別化され、体験を持たない世代がこれを如何に身体化していったのかを考察する。これは文献資料によって各政治運動と記憶の関連を論じた拙論「中国における戦争記憶の変遷ー政治運動に見る記憶表象とその受容ー」(『アジア地域文化研究』2006 年)を実態面から補足するものとなる。

③風俗習慣と記憶の関係――村に伝わる抗日戦争中の出来事に関する覚え歌（順口溜）や講談（説書・評書）を聞き取り、これを文字資料に記録された同じ事件の書かれ方と比較することで、中国農民の戦争を記憶する視点が如何なるものであったのか、書かれた「歴史」との差異において捉える。

④視覚イメージと戦争記憶の関係――中国農村部で戦争のイメージを伝えた視覚媒体である露天映画、連環画、テレビの、戦争記憶形成への影響を論じる。これまでの調査の中で、視覚媒体に触れる以前にも「顔の無い日本兵の夢」を恐怖感と共に見ていた戦争未経験世代の証言が散見される。一方、露天映画を見た後には、同内容の夢が明確な形象感を伴って幅広く見られることが多く証言されている。しかしその夢は、映画の形象感を借用しながらもストーリーは別の何かに基づいている。これらの現象を村の当時の社会背景（農業集団化）や老人の語りとの関連において考察する。また、1990 年代以降にテレビが普及し生産責任制が導入されたことにより、視覚イメージの受容のあり方が変化した。それに伴う記憶の質的変容を併せて考察する。

４．研究成果

具体的成果

①戦争体験の掘り起し:戦争中漢奸とされた人々の出身村及びその家族を中心に聞き取り調査を行った。戦争当時日本軍の通訳を務めた人物 A について、その家族と彼の住んでいた村の村人から聞き取りを行った。それと対照させる形で、戦争中抗日村長をしていた人物 B についても村人たちに聞き取りを行った。村人たちの評価は、歴史評価と逆で、A の人柄をほめ、B を恐れているようだった。彼らの戦後の運命が現在の評価にも影響を与えていることが分かった。また、日本軍宣伝隊長でもあった A は、「順口溜」を宣伝メディアとして活用しており、それも収集に成功した。

②「順口溜」の調査:「趙家荘惨案」(趙家荘での虐殺事件）を旅行記の形式で歌った「順口溜」について、歌中に歌われる村々を訪ね、歌の内容について聞き取り調査を行った。その結果、歌詞にある村名と歌の共有範囲がほぼ重なることが分かった。また、歌われている人物や地名は全て実在し、歌中の旅行ルートは古来から頻繁に往来のあるひとつのコ

ミュニティーであることが明らかになった。調査結果に基づき、日本現代中国学会において発表「「順口溜」から読み解く戦争の記憶」を行った。

③雨乞の調査:「趙家荘惨案」の順口溜が歌う範囲は、文革前まで雨乞いの活動を共同で行っていた範囲であることが聞き取り調査より明らかになった。旅行記は雨を降らせるために、「大王像」を神輿に載せて担いで歩いたルートであり、像を担いで歩いた道沿いにある村全てに雨が降ったと言われる。今回は、「大王廟」を今も残す水嶺底へ調査に行き、その村には2つの大王像があり、ひとつは「順口溜」に歌われる地域を練り歩くもの、もう一つはその逆方向にある盂県を練り歩くもので、二地域を範囲とするコミュニティーの起点になっていることが分かった。

④農村演劇の調査:7月15日（旧暦）の農村演劇（晋劇）を参与観察した。3村の演劇を参与観察し、観衆の様子、舞台裏、演劇誘致の事情について聞き取りを行った。また、この地域で演じられる晋劇の演目と現地の伝承との関連について考察を行った。

意義及び重要性

オーラル・ヒストリーによる各調査結果は、これまで歴史学によっては論じられなかった問題を捉えている。中国農村の前近代的社会によっては、口頭伝達の方法によってコミュニティーが構成され、人々の記憶や自己意識を作り上げてきており、村人の視点からこれらを調査・記録したことは、今後の中国農村コミュニティー研究に寄与する成果であると言える。また、「漢奸」に関する調査は、政治的な問題から日中戦争史の中でほとんど言及されておらず、歴史の空白を埋める意義を有する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計1件）
① 石井弓 「「順口溜」から読み解く抗日戦争の記憶」
日本現代中国学会　第61回（2011年度）全国学術大会

〔図書〕（計　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
石井　弓（ISHI　YUMI）
東京大学・大学院総合文化研究科・特任講師
研究者番号：50466819

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：